日本景観フォーラム会報　第 20号　　発行日 2016年1月4日

景観フォーラム

巻頭言

あけましておめでとうございます。昨年は国内外ともども私たちの生活を根本から問い直すような出来事が沢山起きました。またその生じる頻度も今までよりも大変多くなった感がいたします。

さて、現代を根本から問い直すということは「“近代化”とは何か？」という問いから始めるのがいいのではないかと思います。現代のグローバルな視点から見た万国共通の近代化とは、その国なり社会が産業革命を経て民主主義を基本とした資本主義経済の社会システムを作り上げているかどうかに収斂いたします。イギリスがその先鞭をつけ、仏国、独国そして米国と連なり100年ほど遅れて日本がその近代化を達成いたしました。

環境問題が深刻な状況を呈してきたのもこの近代化の負の側面でしょう。また、安全保障そして原子力発電の問題も、そしてイスラム国（IS）の勃発もこの近代化が齎した資本主義経済システムへの根本的問いかけを避けて通ることはできません。それはまさに「“近代化”とは何か？」を問うことにつながります。

それでは、世界のすべての国が近代化を達成しているかと問えばそうではない国の方が多いかと思います。世界70億人の人口数から言えば近代化を経た社会に生きていない人数の方が圧倒的に多いかと思います。環境問題のグローバル会議COPの中心的課題は、近代化を経た所謂“先進国”にこの近代化をしていない国々が近代化をするための財政的援助を求めているかのように思えます。その声は「私たちも近代社会というものを享受して“豊かな？”社会に生きたいのだ」と。

景観とは何か？という問いかけはまさに「“近代化”とは何か？」という問いに突き当たるのではないかと思います。景観から考えるまちづくりを実践する場合、寛容さと豊かな多様性をベースにして、常に以上の問いかけを心掛けていたいと思います。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。（斉藤全彦）

〈予定〉

景観セミナー

・1月20日（水市ヶ谷JICA研究所　18：30～
「サンゴ礁に於ける「場所」・「景観」の多様性 ～人々とサンゴ礁景観～」講師：中井達郎（日本自然保護協会参与）

・2月19日（金）市ヶ谷JICA研究所　18：30～
「現代の景観（仮）」講師：戸谷英世（NPO法人住宅生産性研究会理事長）

運営委員会

・3月23日（水）飯田橋オフィス　19：00～

環境とこれからの景観

一級建築士事務所　SOGLIOLA　東亭　邦夫

これまで三回のコラムの中で、建築やその関連法規が、優れた景観を作る上でのイニシアチブを失っている事などをお話してきました。景観について過去の文脈を受け継ぐ都市や大規模開発では論じられる事はあっても、私たちが生活する身近な環境で論じられる事はほとんどないのが現状です。それは単に日本人の気質だけではなく、デザインや空間・環境と言った概念に対して生活の中で論じられる事が無いということに大きな問題があるのではないかと思います。学校教育の中でも空間や環境についてのカリキュラムはありません。個々の創造性を伸ばす教育は受けられても、協調しながら空間を創造することは教えられません。優れた景観の源は、身近な環境において何をどう変えれば良くなるのかを、多くの人と共有し、出来ることから実行し、その結果が評価される事です。実現の為には多くの泥臭い地道な作業を必要とするかもしれませんし、多くの時間やエネルギーを必要とするかもしれません。しかし、今ではFacebook等のSNSを使うことで以前では考えられなかったコミュニケーションを取ることが可能になり、そうしたツールを駆使することで景観に関する合意形成は格段にスムーズになりました。そこからどのように行動に結びつけるかというモデルを作ることは、景観に関わる人の使命です。素敵な景観を見つけ出すことなら誰でも出来ることです。そこから一歩前進することが今求められています。

景観を取り巻く様々な問題について、景観フォーラムの皆さんが何らかの形で貢献なさることを祈り、最期のコラムを終えたいと思います。一年の間、意見を発表する場を設けて戴きました斉藤理事長をはじめ景観フォーラムの皆様に感謝いたします。

ありがとうございました。

「放浪の画家　ピロスマニ」を鑑賞して

東野允彦

「心にひらめくままだ。聖ゲオルギウスが、『ニコ、描け、描け』と、おれを動かす」

絵の基本がなっていないという、新聞の批評記事を友人から渡され言った言葉。このシーンが私にとって、とても印象的でした。

聖ゲオルギウスは、ジョージアの守護聖人。彼は、キリストを信じるローマの軍人でしたが、キリスト教の棄教を強要する皇帝に逆らい、信仰に殉じたとされています。グルジア正教会の聖堂には、聖ゲオルギウスのイコンがあります。

心にひらめくまま、心のままに生きる姿は、聖ゲオルギウスとピロスマニの孤高さと重なるものがあるように感じました。聖ギオルギウスのイコンに祈りを捧げる人、ピロスマニの絵の前に立つ人、ともに彼らの心の強さや自由さに惹かれているのかもしれません。

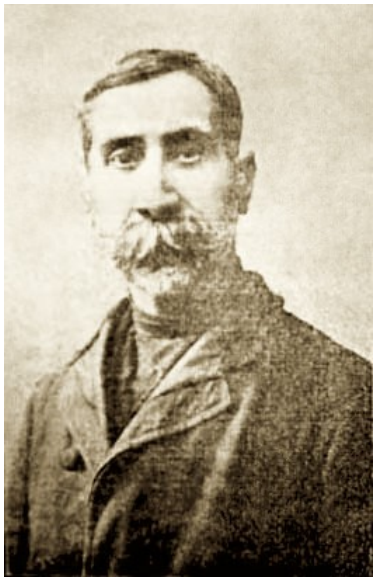
現在のトビリシの町並み。山にはピロスマニの絵にも描かれたロープウェイがあるロープウェイがある

この映画「放浪の画家　ピロスマニ」を観ていて、いつのまにか、私自身と仕事を振り返っていました。

十代のころ、多くの人は心のひらめくまま、××になりたいとか、〇〇したいとか、なにかを志すことがあります。しかし、その思いを貫き通そうとするたび、思いを通すため多くの人と関わるたび、心のひらめくままというわけにも当然いかず、理由や理屈を求められます。そうしているうちに、一本気に突き進む人もいる一方で、思いをすり減らしたり、または途中で違うものを手にしたりして、思いを洗練させ、実践できない人もいます。

出版でも、最後は本を出したいという思いが、本の刊行へと著者を導く重要な点です。本を出してどうするか、出版後の著者の行動です。ところが、出版をゴールとし、出せるかどうかというところに拘ると、そこで終わってしまうということもしばしば……。

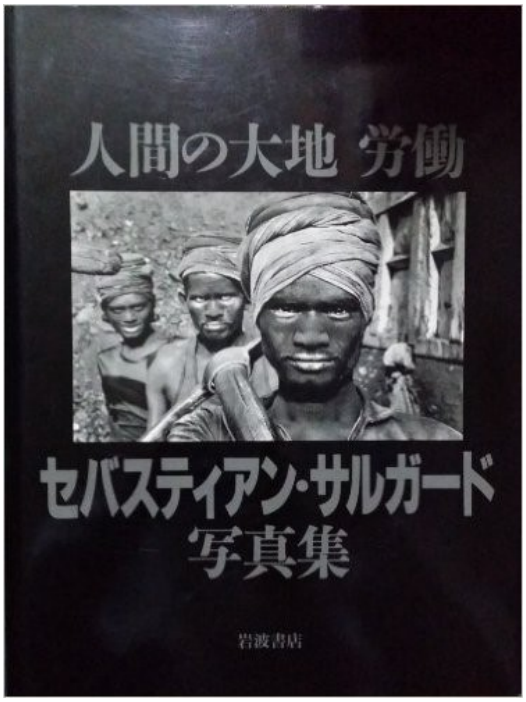
ピロスマニの生涯を彼の作品とともに織っていく、この映画。今回、デジタルリマスターされたとはいえ、画像をクリアにするにも限界があるようです。そこで、2013年11月の当フォーラムの景観セミナーでご講演していただいた、絵本作家の原田健秀先生の著書『放浪の聖画家　ピロスマニ』（集英社新書）をご覧になることをお勧めします。カラーでピロスマニの絵画が多数掲載されているだけでなく、ピロスマニへの愛が溢れる文章とともに、映画の世界観へと導いてくれます。



ニロ・ピロスマニ

＜ＬＦＪブックレヴュー47＞
『人間の大地　労働　写真集』セバスチャン・サルガド写真　岩波書店　1994年原著刊

これらの写真を見て驚嘆されない御仁はいないであろう。今までにない写真集ではないかと思われる。現実の一瞬を撮ることによって人間の限りない儚さを表現したロバート・キャパ。そこで、サルガドの写真集を何と表現したらいいのだろうか。地球という大地に労働という手段を持ってしがみつく人類の在り様の証言ではないだろうか。



セバスチャン・サルガド（Sebastião Salgado, 1944年－）はサンパウロ大学の経済学修士課程を卒業後、エコノミストとして国際コーヒー機構に勤務し、世界銀行のミッションでアフリカを旅し、1973年より本格的に写真家としてスタートしたブラジルの現役報道写真家である。カール・ポランニー著『人間の経済』『経済の文明史』『経済と文明』を基底にしているような視点で、それを彼の独特な角度で捉えるそれぞれに映し出された写真の一葉一葉は見る者を捉えて離さない。

この写真集は凡そ400項余りに亘る写真集の大著である。そしてサルガドの序文には「これらの写真は、一つの時代の歴史を物語っている。ここに映し出された映像は歴史が産業革命と呼ぶ時代、即ち両手を力の限り使って働く男たちや女たちが世界の中心軸を形成していた時代の考古学を視覚的イメージとして示している。今日、生産と効率性の概念は変化し、それと共に労働の概念も変わりつつある。高度の産業化された世界が、よろめきながら未来に向かって疾走している。先進諸国は消費することができる者のためにのみ生産しているが、そうした人間は全世界の5分の1を占めている。残り5分の4の人々は消費者になる可能性を断たれてしまっている。歴史は何よりも絶え間ない挑戦と反復と忍耐の連鎖の歴史である。それはめぐりくる抑圧と屈辱と災難の周期であるが、一方でそれは人間の生存に向けての能力を次代に伝える遺言でもある。歴史の中にはいかなる孤独な夢もない。なぜならある一人の人間の中で懐胎された夢は、次代の人の人生の中で呼吸し始めるからである。（中略）」とある。

近代が世界の景観を劇的に変化させたことは歴史が証明している。ルネサンスという人間謳歌を経ることにより、人類は人間の経験と智を信ずることになった。そして近代の推進力としての方法は産業革命という近代科学技術の力によって一気に拡大した。産業革命は人類の生活手段を激変させ、それは思想として“進化”という概念が“神”の座にとってかわった。近代化とはある意味でこの“神”を失った風景を言うのかもしれない。それは即ち“崇高”という美の観念を失ったのと等しい。サルガドの写真集の何に感動するのかと問えば恐らく、この“崇高”を見出すことに尽きるのではないだろうか。景観ということを人類的観点から考えてみるためにも是非ともこのサルガドの写真集（原著名Workers）をひも解いてほしい。（斉藤全彦）

天地玄黄　⑧「鰻の老舗　川千家」

２０１６年１月１日のお正月に柴又帝釈天へ初詣に行って参りました。
柴又帝釈天は夏目漱石の『彼岸過迄』を始め、多くの文芸作品に登場し、またドラマでは『男はつらいよ』の主舞台となった場所で、ドラマが放映されていた当時は柴又帝釈天は物凄い人気だったそうですが、近年は世代の移り変わりと共に徐々に観光客が減少しています。それでも初詣の期間はたくさんの人で溢れ警察や係員が協力しながら参拝人等を案内していたのが印象的でした。
さて柴又帝釈天の周りと言えば鰻料理が有名で帝釈天の周りにはいくつもの鰻屋さんがあります。そこで私は参拝が終わった後の腹ごしらえとして『川千家』という鰻料理の老舗で食事をすることにしました。
川千家の始まりは始まりは、安永年間（1770年代）です。
安永7年（1778）庚申の日に題経寺で帝釈天王の板本尊（日蓮上人が帝釈天を板に彫った拓本）が発見されて参拝客が増えるにつれ、 茶店がなく不便な柴又では農夫婦達が副業で川魚料理の茶店を開き、川千家もその一つとして開店しました。明治33年には常磐線金町駅から柴又までレールの上に箱車を置きお客を乗せる人車が走るようになり、参道が通ったのを機に、５代目の時代に川べりから現在の川千家の場所に移転し、 柴又で川魚といえば川千家と、地元の人々や参詣客に親しまれ続け、お蔭様で現在は１０代目を数えているらしいです。

しかし老舗と聞くと何だか老舗の気取りや敷居の高さを思い浮かべますが、川千家は決して敷居の高さ等は微塵もなく逆に庶民的な雰囲気が漂っていていました。パンフレットにも『お一人様でも気軽にお入りいただける..』と書いてありましたが正にその通りだと感じました。
店の外観は歴史の重みが感じられる建造物の姿をしています。建物内は食事処の為、古臭さ等は無く清潔で綺麗です。一言で纏めるなら昭和の香りも残しながら綺麗な佇まいをしています。
さて肝心の鰻のお味ですが口に入れる度に鰻がほぐれるのですが、蒸し過ぎて柔らかすぎるということもなく、鰻の存在感を口に感じることが出来る大変美味しい鰻でした。
お値段は4000円程度なので決して安くないですが、是非柴田帝釈天に行く機会があれば散策ついでに是非寄ってみてはいかがでしょうか？
執筆者『カンマネ』

〒150-0031
東京都渋谷区桜丘町14-5-502

TEL：03(3780)3814
FAX：03(6379)6681
E-mail：info@keikan-forum.com
URL：http://www.keikan-forum.org

Landscape Forum of Japan